

「富士山を詠む」俳句賞



一般の部

選評：渡井恵子



富士山人賞

選評

いわゆる水田の逆さ富士である。その富士を揺らしながら田植が始まっている。こどもは手伝いというより、泥遊びに懸命である。句からは作者の弾むような喜びが伝わってくる。富士山の伏流水の恵みを受け、その裾野の農村の田植の風景が実感を伴って広がっている。

田植の子水面の富士をくすぐれり

富士市 斎 柊子



富士山地賞

選評

霊峰富士を敬い、称えている。人間はもとより獣も樹木、草木に至るまで富士山の中では等しく一点でしかないと思われている。空は限りなく深く、岩雲雀は鳴きながら雲海に消えてゆく。大いなる山に抱かれている安らぎがあり、想念と実感を併せもつ作品である。

富士に立つ我も一点岩雲雀

富士宮市 佐野壮威



富士山天賞

選評

梅は春告草ともいわれ、春の花にさきがけて咲く。まだまだ寒気は厳しいが、蕾は確かな春の到来を告げている。山頂の雪を越えゆく雲もどことなく軽やかである。春を迎える喜びがあり、発見の目がある。梅でなければならぬ季節感あり、雪と雲と梅の白の重なりが、格調の高い句となっている。

梅ふむ富士越ゆる雲軽やかに

富士宮市 小林光示



佳作

山の灯の連珠となりて富士登山

山梨県南都留郡西桂町 新田宏子

富士よりの水に泳がせ新豆腐

山梨県都留市 前田智子

夕富士を誉めて端居に加はれり

富士宮市 小澤円梨

農鳥は祈りのかたち雪解富士

奈良県奈良市 堀隼人

大富士へ百の放水出初式

静岡市 藤本節子

遠富士は日本のおべそ薫日和

神奈川県横浜市 石田樹覚

朝涼の大富士のもと牛放つ

富士市 田中由美子

夏富士の近づく程に荒あらし

伊東市 日吉伊豆美

小中学生の部

選評：渡井一峰

富士山人賞

選評 毎年七月七日に行われる富士山本宮浅間大社の「御田植祭」でしょうか。このお祭りは、サオトメ（早乙女）のマイヒメ（舞姫、近隣の小学六年生女子）とウタヒメ（歌姫、同五年生女子）約三十名によって浅間大社境内南の神田宮で行われます。富士山に見守られ、歌姫役の早乙女さんが上手に「田植歌」を歌うことができたのです。

お田植え祭上手に歌った富士山と

大宮小学校五年 野原采紗

富士山地賞

選評 今まで住んでいた家を建て替えたのか。よそから移り住んだのかはわかりませんが「新しい家」から最初に見えたのが夏の富士山だったのでしょうか。その感動がよく伝わる、わかりやすく、はつきりしている句です。

新しい家から見えた夏のふじ

上井出小学校三年 植松晴一

富士山天賞

選評 夏山となった富士山。初夏に雪が消えはじめると富士の山肌がしっかりと表れてきます。この句はふもとから見た富士山と身近にいるお父さんのイメージを重ね合わせることで、富士山の雄大さ、頼もしさを表すことに成功しました。大好きなお父さんと同じくらい富士山のこと

おおきいな父の後ろに夏の富士

富士根北小学校三年 中野優汰

佳作

よるのふじのぼるひかりのれつしやかな

富士根南小学校一年 稲葉敬一

富士山に泳ぎきつたと伝えよう

富丘小学校六年 原 優樹斗

雪とけた富士をながめて釣り大会

貴船小学校六年 森 渚聖

夏休み九九をふく習富士に言う

黒田小学校四年 久我乙葉

上段に構え見つめる五月富士

富士宮第四中学校三年 山内悠真

富士登山母の服着ていざ挑む

富士見小学校六年 朱 悠成

猛暑日に至む富士山シユリーレン

西富士中学校三年 坂下孝太